われらの祈り、教会の祈り　　**使徒の働き 1:12～14**

今日の箇所は復活されたイエス様が 40 日間にわたって弟子達に現れ、大宣教命令を与え、また天に戻られた後のことが書かれています。この後、イエス様と入れ替わるようにして聖霊が降ります。いわゆるペンテコステの出来事ですね。ただイエス様の昇天があってすぐにではなく１０日間してから聖霊が降ります。その間、弟子たちは何をしていたかと言うなら彼らはずっと祈っていました。聖霊が人々に降ってからのことは次の２章に出てきます。聖霊の降臨は教会の誕生ということでよく知られています。ただ聖霊が降った瞬間、教会があったということではありません。山室軍平という人の名前を聞かれたことがあるでしょうか？　救世軍という勇ましい名前のキリスト教団体があります。これは名前とは全く違って世界的なキリスト教の奉仕団体です。山室軍平はその日本の救世軍の創始者です。今はあまり見ませんが年末に社会鍋といった炊き出しは彼によって始められました。山室軍平は「民衆の聖書」というタイトルの聖書の解説書を書いていますが今日の使徒の働きの１章につけられたタイトルは「戦闘準備」です。勇ましいですね。戦闘あるいは戦いは次の２章の聖霊が降るところから始まる「福音宣教の戦い」のことを意味しています。そうしますと今日の１章は２章以後の聖霊によって始まる福音宣教の戦いに向けた戦闘準備ということになります。そして何をもって準備していたかというならそれは「祈り」です。私たちの教会は来月は宣教月間ということで福音宣教の働きを進めよう計画していますがそのための最良の準備は祈りだと思います。ですから「祈り」について今日のみことばから学んでゆきたいと思います。

１．何を祈ったのか？

まず弟子たちは何を祈っていたのでしょうか。彼らが何を祈ったかは聖書に書かれていませんが、想像してみるのも悪くないと思います。彼らは「あれを下さい。」「これを与えてください。」「もっと元気にしてください。」などそのようなことを朝から晩まで祈っていたのでしょうか？　そうは思いません。弟子たちはまず、悔い改めの祈りを捧げていたと思います。ここには、ペテロをはじめ、十一人の弟子たちの名前があげられていますが、彼らは、特別に選ばれた弟子でありながら、イエスがお苦しみを受けたとき、イエスを見捨てたり、否定したりした人たちでした。イエスが復活なさったときも、すぐには、そのことを信じようとはしませんでした。「聖霊」は文字通り、「聖」なるお方です。聖霊を迎えようとする者がきよめられていなくていいわけがありません。もちろんきよめてくださるのは聖霊ですが、人間の側でも、悔い改めをもって、きよめを願い求める必要があります。そんな堅苦しいことを言わないでという人もおられると思います。でも親しき中にも礼儀ありと言うように聖なるお方に対して祈ろうとするわけですから立つこちら側も神の聖さの前の姿が問われます。そうしますと悔い改めの祈りに導かれるのは自然なことではないでしょうか？

また、弟子たちは、聖霊によって果たすべき使命を思い、そのために、自らを整え、捧げる祈りをしたことでしょう。主イエスが弟子たちに遺していかれた言葉はこうです。「聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。」（使徒 1:8）聖霊は、わたしたちをきよめ、力づけ、導き、わたしたちに知恵と力、その他、さまざまな賜物を与えてくださいます。しかし聖霊が与えられる第一の目的は、わたしたちがキリストの証人になることとみことばは示しています。聖霊は三位一体の神ですから私たちはいろいろとその働きを拡大解釈しがちです。しかし聖霊の一番の働きは私たちがキリストの証人となることです。ですからキリストの証人とはキリスト教的な私の話をするのではなく、キリストを証しすることになります。聖霊を求めることや聖霊の満たしを願うことは素晴らしいことです。しかし、キリストを証しするという目的を見失うと、聖霊の満たしが自己満足になったり、自分に与えられた賜物をまるで自分の力であるかのように誇ったりして、聖霊を悲しませるようになります。聖霊を受けるのは、それによってわたしたちがキリストに仕え、教会に仕え、人々に仕えてキリストを証しするためです。弟子たちは、聖霊を受ける目的を間違えることがないように、主からの使命に生きることができるようにと祈ったに違いありません。

２．どのように祈ったのか？

では、弟子たちはそうしたことをどのように祈ったのでしょうか。使徒 1:14 は、「彼らはいつも使徒たちの教えを堅く守り・・女たちとイエスの母マリア、およびイエスの兄弟たちとともに、いつも心を一つにして祈っていた。」と言っています。これを読むとみんなで心合わせて祈ることが大切であることが強調されているように見えますが「いつも心を一つにして祈る」というところは、新改訳三版では「心を合わせ、祈りに専念していた」と訳されています。ここには「心を合わせる」と「専念する」という 2 つのことばが使われています。「専念する」は新改訳 2017 では「いつも」にあたりますがそれでは少し意味が隠れているように思えます。聖書では、この「専念する」という言葉は、ほとんどの場合、「祈り」という言葉と一緒に使われます。使徒 6:4 で使徒たちは「私たちは祈りと、み言葉の奉仕に専念します。」と言っています。弟子たちは聖霊を受けるために祈りに専念しましたが、聖霊を受けた後は、もっと祈りに専念するようになったことが分かります。さらに祈りに専念するのは使徒たちだけではありません。ローマ 12:12 に「ひたすら祈りなさい」、コロサイ 4:2 に「たゆみなく祈りなさい」とあって、同じ「専念する」という言葉が使われています。使徒たちばかりでなく、すべての信仰者が「祈りに専念する」ようにと教えられているのです。

初代のキリスト者は、祈りに専念していました。「専念する」とは「忙しい」とか「没頭する」という意味がありますので「祈りに忙しくしていた。」あるいは「祈りに没頭していた」とも言えるでしょう。他のどんなことよりも祈りを優先していたのです。ところが、現代のキリスト者は、他のことに忙しくて祈りに時間を割くことをしなくなりました。自分自身反省させられていますが「忙しくてなかなか祈れません」と言って、仕事やプライベートで「忙しい」ことを、祈らない言い訳に使ってしまいます。また祈りの課題をあげてそれが達成されるかどうかだけに関心が行ったりします。もちろん、私たちは今から二千年前とはまるで違った環境の中で生きています。現代が祈りに専念するのが難しい時代であることは誰もが知っています。だからこそ教会で祈りが重んじられ、ここ、かしこで人々がひとりで祈る、あるいは二人、三人で祈り合う姿を見たいと思うのです。

3. 誰が祈ったのか？

さて、最後に、どんな人たちが祈ったのかを学びましょう。聖霊が降るのを待ち望んで祈っていたのは、使徒 1:15 によれば百二十名の人々でした。男性ばかりでなく、女性も多くいました。みんながひとつになって祈りました。すべての弟子たちが、ひとつ所に集まり、ひとつ思いで祈ったのです。そして聖霊は、祈りを共にした百二十名のすべてに降りました。聖書は、わたしたちに、ひとりきりになって祈るように教えると同時に、信仰者たちが共に集まり、思いをひとつにして祈ることをも教えています。初代のキリスト者は、いつも共に集まり、集まっては祈りました。

この後、使徒の働き 4 章に、ペテロとヨハネがユダヤの議会から審問を受けたときのことが書かれています。そのとき、信仰者たちはひとつところに集まり、祈りました。ペテロとヨハネが釈放された後、その集りに行き、議会での出来事を報告すると、「これを聞いた人々は心を一つにして、神に向かって声を上げて」祈りました。その祈りが終わると、「集まっていた場所が揺れ動き、一同は聖霊に満たされ、神のことばを大胆に語り出した」のです。

使徒 12 章には、ペテロが捕まえられ、処刑されようとしたときも熱心な祈りが教会によって捧げられたことが書かれています。ペテロは、主の使いによって牢から解放されてから、マルコの母親の家に行きました。そこで人々が集まって、ペテロのために祈っていたからです。教会の誰か熱心な人が祈っていたのではなく聖書は使徒 12:5 で「教会は彼のために、熱心な祈りを神に捧げていた」と言っています。もちろん教会の中の誰かが祈っていたわけですが「教会が祈っている」という表現は力強く感じます。教会はその誕生の前から祈り、その後も祈りに専念しました。教会は祈りました。今も祈り、これからも祈り続けるのです。現代の教会、私たちの教会も、「教会は祈っていた」と言われる教会でありたく思います。

大勢が一緒に集まるというのは、それだけでも、人々に励ましを与えてくれます。誰かが自分のために

祈ってくれる祈りを聞くと感謝を覚えます。しかし、一緒に祈るというのは、そうした人間的なものを与えたり、受けたりすることで終わるものではありません。信仰者がひとつ心になって祈るとき、その人数がひとりでも多ければ、また、その祈りが忍耐ぶかく積み重ねられたものであるなら、それは霊的に大きな力となるのです。祈るのは、わたしたち人間ですが、祈りが神のもとに届くとき、それは人間の力を越えたものになるのです。そのことを信じて祈るわたしたちでありたく思います。

今日のメッセージをまとめます。まずあなたは何を祈っていますか？　祈る前にどのように神の前に出ているでしょうか？　キリストを証し出来る者となることを祈っているでしょうか？
次にどのように祈っていますか？　祈ることに忙しいですか？　祈り以外のことで忙しいので祈れませんか？　最後に誰が祈っていますか？　祈りは自分一人で完結するものではありません。時々、自分のことが祈られているんだろうかと思う方がいますがそんな人こそ他の方々と共に祈ることをお勧めします。さらに他の方々のために祈ることもお勧めします。そうすると自分が祈られていることがよく分かります。「私は祈ってもらう人、あなたは私のために祈る人」それでは教会は成長しません。あなたの祈りは教会の祈りです。教会の祈りはあなたの祈りなのです。

今年の宣教月間のテーマは「きずな」です。私たちは関係の中で「きずな」つまりつながり、成長しながら生きています。まず神様とのつながりがあります。次に主にある兄弟姉妹、つまり他のクリスチャンの人たちとのつながりがあります。それ以外にも様々な人間関係のつながりを持ちながら生きています。その関係あるいはきずなを保つうえで何よりも大切なものは祈りです。祈り無くしてきずなを深めることはできません。そのようなことに思いを馳せながらふとこのようなことを思いました。寒いダジャレと笑われるかもしれませんが私は祈りは神様と私、イエス様と私、他の人々と私を結びつける「良い糊」（上質な接着剤）のようなものだと思うのです。祈りによって神様と、イエス様と、また他の方々とのきずなが深められるのです。互いに祈り合い、キリストを証しする者とされ、聖霊の働きを期待して歩んでまいりましょう。